ザンビアの助産・母子保健に関する研修 (inザンビア カッパーベルト州,ルサカ州)

2016/9/13~2016/9/24

看護学コース3年　三宮柾名

渡航先での活動内容

ザンビアの位置と母子保健について

ザンビアはアフリカ中南部にある内陸国です。銅の輸出が主要産業となっており、独立後内紛が1回も起きていない、比較的安定した国です。

妊産婦死亡率は500人/10万人。日本の数値がこれの100分の1以下であることを考えると、医療で救えうる多くの命が出産で奪われているという現状があります。

ムタバ保健センターでのインターンシップ

首都からおよそ300km。電気水道ガスなど何もないムタバ村の保健所で、妊婦検診、分娩介助、産後検診などの補助を行いました。

村では母子保健ボランティアが養成されており、家族計画や性感染症予防、予防接種などのガバナンスの担い手として機能しています。

村には日本の国際協力NGO "JOICFP" が建設した母子保健棟や母子保健スタッフの会議室などがあり、有用に使われていました。

ルサカ中心部の病院見学

首都ルサカ到着後数日間、ストリートチルドレンと生活を共にしました。彼らの中で体調不良者が2名発生し、付き添いという形で2つの病院を訪問させて頂きました。

整理整頓や手洗いなど、日本では基本と思われているところに大きな課題がありました。また医療者不足が深刻で、医療系実習生が即戦力として使用されていました。

ザンビア保健省訪問と、さくら会でのインタビュー

ザンビア保健省で、日本から派遣されているJICA プロフェッサーの方々にインタビューを行い、進行中のプロジェクトの実態と課題についてお話を伺いました。

さくら会(在ザンビア日本人女性の会)では、ザンビアで出産育児を経験した日本人から、当時の貴重なお話を伺うことができました。

目的と評価

目的

①国際医療支援がザンビアの母子保健に与えている影響を知る
②男性助産師の意義について考える
③ザンビアの助産・母子保健の良い点と課題を考える

評価

①・・予防接種や助産師教育などの国家的介入は、国際医療支援機関からの援助を受けて実施されており、乳児死亡率や妊産婦死亡率が年々改善している。その一方、乳幼児の数が爆発的に増加しており、今後職業や食糧面で逼迫した状況になることが予測される。物資支援を行っても、それらが転売されてテレビやビリヤード台になっている村落があることも判明した。

②・・・国民の半分は医療者無しで出産しているザンビアにおいて、助産師の育成は喫緊の課題であり、男女問わず助産師を大量に育成している。その一方、男性助産師による出産を望まない女性もいる。助産師の性を選べることを保障したシステム作りが望まれる。

③・・・住民の協力関係が非常に強く、産前産後のドゥーラ的機能を地域が担っていたのは非常に良い点だった。物資や知識を含め、あらゆる医療資源が不足していることがやはり課題として明確だった。

反省点

・地域との信頼関係ができるにはやはり時間がかかる。信頼関係をより強められたならば、他の情報を得ることができたのではないか…というのが反省点としてあげられる。

グローバルな視点とは何か

"Publicの為に何がBetterなのか"を念頭に置きながら、情報収集する際に持つべき視点こそ、グローバルな視点であると考える。国際保健の発展において、既存のモデルを適用するのではなく、適用先に合わせた形にモデルを変容することが重要である。

将来の進路決定へどう影響したか

2回の海外研修を通じ、助産・リプロダクティブヘルス分野の保健政策に関する課題が山積しているにも関わらず、それに関する研究・研究者が世界的にみてとても少ないことを感じた。現在は、助産・リプロダクティブヘルス分野の政策形成の国際的なオピニオンリーダーになることも将来の進路の一つとして考えている。

後輩へのアドバイス

・自主計画を立てる大変さはあるが、その分学ぶことも多い
・様々な機関に積極的にお願いすれば多少の無理は通りうる。

研修支援制度に望むこと

・特にございません。2回も行かせて頂きありがとうございました。